



Title	デュルケームのプラグマティズム理解
Author(s)	堀, 雅彦
Citation	北大宗教学年報, 1, 17-25
Issue Date	2018-08-31
DOI	10.14943/85640
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/71507">http://hdl.handle.net/2115/71507</a>
Type	bulletin (article)
File Information	1_3_hori.pdf



[Instructions for use](#)

【研究ノート】

## デュルケームのプラグマティズム理解

堀 雅彦

### はじめに<sup>1</sup>

本稿の主な考察対象は、エミール・デュルケーム（仏 1858-1917）が 1913 年（『宗教生活の基本形態』刊行の翌年）から 1914 年にかけて行った二十回の講義である<sup>2</sup>。「プラグマティズムと社会学」と題するこの講義（以下、「プラグマティズム講義」と略記する）の原稿はすでに失われており、そのことをマルセル・モース（仏 1872-1950）が 1922 年の『社会学年報』で大いに惜んでいる<sup>3</sup>。その後、残された少数の覚え書きと、受講していた二人の学生のノートをもとにアルマン・キュヴィリエ（仏 1887-1973）らの手でその内容が再構成され、1955 年によく公刊にたどりついている（邦訳 1960 年、英訳 1983 年）。

再構成された講義録は、デュルケームによる引用箇所の手を丹念に（一部誤りもあるが）特定するなど、編者らの苦勞がにじむものとなっている。しかしながら、この書物に対する関心は一般に低い。哲学の領域でこれに注目する論者は（プラグマティズム研究の領域を含めて）ほぼ皆無と言え、他方、社会学の領域でこれに注目する論者も（デュルケーム研究者を含めて）少数にとどまる。英訳版の講義録の編者ジョン・オールコックは、この講義が社会学者から「無視」（neglect）されていると表現しているが<sup>4</sup>、管見ながら日本の状況も同様（あるいはそれ以上に顕著）と見える。労作ではあれ論旨そのものに関わる決定的な誤訳を含む邦訳書がいまだ修正されずにいることも、この講義に対する関心の薄さを反映していよう。

このように総じて軽視されてきたこの講義だが、ここに社会学者デュルケームの哲学思想、少なくともその一端が、プラグマティズムとの対峙を通してかなり詳細に示されていることは確かである。また、ここでのデュルケームの中心的な批判対象であり、私自身の目下の研究対象でもあるジェイムズとデュルケームの思想の間には、単なる対立にとどまらない両義的な関係があると思われる<sup>5</sup>。そうした問題への考察の手がかりを掴むためにも、まずはこの講義の趣旨を本稿においてあたらしく明確にしておきたい。

### 1) プラグマティズム講義の意味

デュルケーム自身は、この講義の意味をどのように捉えていたのだろうか。「国民的な観

点から」見た場合、デカルト哲学や「合理主義」の伝統を本質とする「フランス精神」l'esprit français を守ることがこの講義を行う目的だと彼は述べている<sup>6</sup>。ここには当然ながら、アメリカ生まれの哲学としてのプラグマティズムとの文化的な闘争の意志が示されている。しかしながら一方において、この講義でデュルケームが同国人である哲学者ベルクソンをも批判対象としていることは見逃せない。清水強志氏の指摘によれば、当時のフランス知識界は「デュルケームを中心とするソルボンヌの精神とベルクソンを中心とするコレージュ・ド・フランスの対立状況」にあった<sup>7</sup>。そのベルクソンが、当時プラグマティズムを代表する存在であったジェームズと極めて親しい関係にあったことは、よく知られるとおりである。また、「現代の最も偉大なる合理主義者」<sup>8</sup>とデュルケームが賞賛するシャルル・ルヌーヴィエ（仏 1815-1903）や、ベルクソンとデュルケームの共通の師であったエミール・ブートルー（仏 1845-1921）までが、ジェームズの思想に賛意を示していたことを、このときデュルケームが意識しなかったはずはない。

その意味では、ここでデュルケームがフランス精神を危機に晒していると見ていたのは外来哲学としてのプラグマティズムだけではなく、当時フランスの内部にさえ拡散しつつあった広義のプラグマティズムであり、彼自身の言葉によれば「プラグマティズム運動」le mouvement pragmatiste だったと言えよう。

広義のプラグマティズムの拡大を、デュルケームは「理性に対する襲撃」と評し、われわれは「武器を携えて」それと闘わねばならないとさえ述べている<sup>9</sup>。

この闘いは、すでに述べた「国民的な観点」から見れば、合理主義を基礎とするフランス精神を守るための闘いであり、「哲学的な観点」から見れば、全般的に合理主義の傾向に沿ってきた哲学の伝統そのものを守るための闘いだとデュルケームはいう。実際、その議論内容は高度に哲学的なものである。論敵であるプラグマティストやベルクソンの著作を丹念に読み込んでいることは一見して明らかであり、プラトン、スピノザ、ライプニッツ、ヒューム、カント、ニーチェといった哲学者への言及にも唐突なところがない。前出のモースが、失われたこの講義の原稿について「デュルケームの哲学上の仕事の総仕上げ」にあたるものだったと評しているのも頷ける。

「社会学者」デュルケームの仕事としてはあまりに哲学的とも言えるこの講義が、編者キュヴィリエが言うとおりに、『宗教生活』、特にその結論の最終節（第四節）の続編と位置づける一面を持っている点にも注目したい。これは単に社会学者の哲学趣味を満たすための長いあとがきのようなものではなく、『宗教生活』における議論の根本をなす認識枠組みを、より哲学的、かつ論争的な仕方でも再提示したものと言えそうである。

## 2) プラグマティズムの真理論

プラグマティズムが特に興味深いのは真理論の側面だとデュルケームは言い<sup>10</sup>、その観点からジェイムズの『プラグマティズム』（仏訳 1910 年）と、その続編にあたる『真理の意味』（仏訳 1913 年）に注目している<sup>11</sup>。

ここで目を引くのは、一般にジェイムズの真理論の要と見られている部分、すなわち、真理を有用性の観点から再規定した部分よりもむしろ、ジェイムズが従来 of 真理論を支配してきた独断論を退けた部分に、デュルケームがいつそう強い関心を示している点である。従来 of 真理論を支配してきたのは、真なる観念とは外的な実在を忠実に模写したものだというドグマだとジェイムズは言う。プラトン以来の合理論（観念論）の伝統においても、それと対置される経験論においても、このドグマは保持されているとジェイムズは言う。つまり精神的な実在であれ、感覚的な実在であれ、観念の外部にある実在との一致を真理と解する点で、合理論と経験論は暗黙にして共通の前提に立つのである。

この前提ないしドグマをジェイムズは模写説（copy-theory）と呼んでおり、これに対する批判は、『プラグマティズム』以上に、『真理の意味』において集中的になされている。哲学史上の意義としては、有用性に基づく真理論以上にラディカルな問題提起であり、それは現代のネオ・プラグマティズム（とりわけリチャード・ローティの哲学<sup>12</sup>）にも継承されている。デュルケームがこの時点でここに着眼しえたのは驚くべきことである。

デュルケームの理解では、こうして実在を模写する要請から解き放たれた思考を、ジェイムズらプラグマティストはもっぱら行為・実践上の「有用性」の要請に結びなおしているが、これは「論理的功利主義」と呼ぶべきものにすぎない。この点に対する彼の見方は（後に見るように）極めて厳しい。

## 3) 実在の「創造」という視点

しかし、一方においてデュルケームは、模写説を退けたジェイムズが、思考と実在を単に切り離すのではなく、両者の関係を新たな仕方で捉えなおしていることにも注目している。

「大部分の理論家が思考を、事物を映し出す鏡として表象しているのに反して、プラグマティストたちは思考が事物に加わり、一体化すると考えている」<sup>13</sup>。

ジェイムズに代表されるプラグマティストのこのような考え方を、デュルケーム自身がどう評価しているのかは、曖昧な部分もある<sup>14</sup>。しかしながら、全体的な論調は以下のとおりである。

- 1) 模写説の放棄というプラグマティズムのラディカルな姿勢には、少なくとも全面的には賛同していない。
- 2) 真理を実践的な「有用性」に依存するものと見る真理観には、極めて否定的である。
- 3) 思考が実在への付加をなすという見解は受け入れている。

思考の「付加」的側面への関心は、講義の回数が進むにつれ、「プラグマティストによれば、実在はわれわれの作品である」<sup>15</sup>といった、よりラディカルな表現をとるようになる。すなわち、思考が実在に「付加」をなす、ということとどまらず、思考が実在を「作り出す」という表現（ジェイムズよりはシラーに特徴的なもの）が頻繁に引用されるのである。

終盤の講義においては、デュルケームは以下を自らの立場として述べている。

「結局のところ、実在を創造するのは思考である」<sup>16</sup>。

この一文のみを見ると、プラグマティズムの見解を率直に受け入れたかの印象を受けるが、そうではない。デュルケームによれば、ここでの「思考」を、プラグマティズムは個人に属するものと見ている。これに対し、デュルケームは実在を創造する力は個人ではなく集団の思考に帰せられねばならないと主張するのである。つまり思考による実在の創造というプラグマティズムの大胆な立論を、デュルケームは社会学的観点から批判的に捉えなおしつつ、自家薬籠中のものとするのである。

ただし、すでに見たようにデュルケームは少なくとも全面的には模写説を放棄していない。そのことは思考と実在についての上のような見方と矛盾するのではないか。この点について、彼は概略、次のように考えている。

思考ないし観念が真と見なされるのは、それが実在と一致しているときではなく、実在と一致していると信じられるときである。そのような信念へと人々を方向づけるのは、彼によればその表象が人々を社会的に結びつける力であり、つまり「より高い実在」としての社会をつくる力そのものである。「観念は実在に一致するが故にではなく、その創造的力の故に真なのである」<sup>17</sup>。彼が科学的真理と並ぶ「神話的真理」の根強さを論じるのは、この理路においてである。

デュルケームによれば、このような真理の社会的性格を踏まえるならば、真理が個人にとって「強制的」な権威を持つことが容易に理解される<sup>18</sup>。真理はかつての合理主義者（観念論者）が考えたように「英知界や神的悟性の領域」に存する永遠なるものではない。それは

（プラグマティストも認めるように）あくまでも人間的なことがらであり、歴史的に可変的なものにとどまる。しかしながら真理は、プラグマティストが考えるように個人的なことからはではない（つまり human だが personal ではない）。個人の意識をはるかに越えた社会的なことがらであり、従わざるをえない権威をもって個人の前に立ち現れるのである。

#### 4) 思考と実践の一体性

デュルケームは「道徳的理想が行動にとっての規範であるように、真理は思考にとっての規範である」という言葉でこの講義を締め括っている<sup>19</sup>。『宗教生活』にも通底するカントの思弁理性（理論理性）と実践理性の一体性に対する彼の強いこだわりを、ここにも見ることができる。

『宗教生活』の彼はこう述べている。

「一方の科学と、他方の道徳ならびに宗教とのあいだには、多くの場合認められてきたような二律背反のたぐいは存在していない。それどころか、人間のこれらの異なる活動様式は、実際には唯一の同じ源泉に由来しているのである〔傍点付加〕。これはカントがよく理解していたことであり、そしてこのことが、彼が思弁理性と実践理性とを、同じ能力の二つの異なる側面と見なした理由なのである」<sup>20</sup>。

ここでいう「唯一の同じ源泉」とは、カントにとっては普遍的なものへの志向であった。デュルケームもまた、カント主義者として、それを是認している。しかし、タルコット・パーソンズは彼自身にとって二度目のデュルケーム論<sup>21</sup>において、「聖のカテゴリー」こそが、デュルケームにとって認知と道徳のカテゴリーを結び合わせる総合ないし母体（matrix）だった、との認識を示している。つまり思考と実践の規範をメタレベルにおいて、あるいは基層において媒介するものが聖なるものとしての社会的実在だったということである。なお、ここでの思考と実践の対置は、belief と practice（信念と儀礼）の対置と緩やかに対応しよう。

もちろん、プラグマティストもまた、思考と実践の一体性を重視する。しかしながらデュルケームがいかにも受け入れることができなかつたのは、ジェイムズらが思考を直接に実践に従属するものとした（と、少なくともデュルケームには思えた）点であろう。そこには、両者を上位あるいは基層において結ぶものがない。真なるものを善なるものの一種と捉え、なおかつその基準を「有用性」や個々人の「満足」に求めることで、プラグマティズムは思考と実践の双方（とりわけ前者）を規範なき恣意性にゆだねてしまったとデュルケーム

ムは言う<sup>22</sup>。

「それ〔プラグマティズム〕を本質的に特徴づけているものは、厳格なる知性の訓練そのものに対する苛立ちである。それは行為よりも思考を「解放」することをはるかに強く熱望する。プラグマティズムの野心は、ジェイムズの言うように「真理を柔らかくする」ことなのである」<sup>23</sup>。

ここで注目すべきは、この講義が、当時デュルケームの学生でもあった息子アンドレを含め、若い学生たちのために企てられたものだったということである。当時のフランスにおけるプラグマティスト、とりわけジェイムズの著作の広がりには目覚しいものがあった<sup>24</sup>。その多くが講演録・講義録であり、学問的訓練の不十分な学生にも読みやすいものであったことも、デュルケームに「理性への襲撃」とまで言わせる要因だったかもしれない。

## 5) プラグマティズムの「誤謬」

「プラグマティストたちの誤謬は、知識の独自の特性を否定し、その結果として思考の、ひいては意識の独自な特性をも否定したこと」だとデュルケームは言う<sup>25</sup>。意識の独自な特性とは、「意識なしには存在しないであろうような存在者を構成すること」である。すでに見たとおり、人間の思考はその集約的な形態において社会という高次の実在を創造すると彼は述べている。社会の創造はまた、それを構成する個々人の創造でもある。意識なしには存在しないであろう存在者とは、社会のことであると同時に、社会的存在としての自己であろう。

もっとも、「思考を存在に結びつけ、思考を生活に結びつける」プラグマティズムの基本的な発想は、社会学にも不可欠のものだとデュルケームは言う。しかしながら、その場合の「存在」と「生活」は、彼にとっていずれも個人的なものと社会的なものとの二元性と相互浸透（あるいは合一）を本質とするものであり、この発想は『宗教生活』の根幹をなすものでもある。他方、プラグマティズムを代表するジェイムズは『諸相』において、顕在化した意識と潜在意識の二元性と相互浸透（あるいは合一）を鮮烈に論じたわけだが、デュルケームにしてみればそれはなお、個人を超えた真理や理想の由来を説明するものたりえない、ということになるだろう。

この点に関してデュルケームと好対照をなすのは、前述のエミール・ブートルーである。デュルケーム（およびベルクソン）のかつての師であったブートルーは、ジェイムズと長年にわたる交友を結び、『諸相』の仏訳が刊行される際には進んで序文を寄せている。さらに、

ジェイムズの没した翌 1911 年にはジェイムズの人生と哲学を論じた単著を書いている<sup>26</sup>。その序文に、次のような一節がある。

「ジェイムズは哲学の根が生活にあることを教えてくれた。集団的、非人格的な生活ではなく、個人の具体的な生活にこそ、哲学の根があることを教えてくれた。そのような生活のみが、真に存在する生活なのだ」<sup>27</sup>。

## 結び

結局のところ、ジェイムズに連なる哲学者（そこには狭義のプラグマティスト、さらにはアメリカの哲学者のみならず、ブートルーやベルクソンといった人々も含まれる）とデュルケームの間には、「真に存在する生活（あるいは「生」）」をめぐる越えがたい対立があると言えよう。おそらくジェイムズならばそれを哲学的「気質」の違いと受け止め、その差異を彼の多元的宇宙の中へと包み込むであろう。他方、デュルケームはそれをも拒むにちがいない。これもまた気質の違いと言えなくもない。

しかしながら今、そのような哲学の心理学的相対化をもって結論とすることに、さしたる意味はあるまい。すでに功成り名遂げた晩年に至ってもなお、自らと根を異にする哲学と対峙し、あるいは格闘し続けたデュルケームの思想の全体像は、いまだ見えない。私自身はデュルケーム研究の世界の外側に立つ者だが、彼の学問の哲学的な背景は十分な関心を集めていない印象を受ける。特に「私は哲学から出発して、そこに戻ろうとしている」<sup>28</sup>と語ったという晩年の思想については、さらなる考察が求められるものと思う。

---

<sup>1</sup> 本稿は、科学研究費補助金（基盤研究（C））「宗教学の生成とその展開に関する総合的研究」（研究代表者・江川純一）の助成による共同研究の成果の一部であり、日本宗教学会第 76 回学術大会（2017 年）パネル「デュルケーム宗教学思想の可能性—没後 100 年によせて」

（代表：山崎亮）での堀の発表「デュルケームとアメリカ哲学—その距離と接点」の原稿に加筆修正したものである。なお、この発表の要旨は『宗教学研究』第 91 巻別冊に掲載されている。パネルでのディスカッションは筆者にさらなる考察の必要を痛感させるものだったが、その課題は本稿の段階でもいまだ十分には果たされていない。

<sup>2</sup> Emile Durkheim, Pragmatisme et sociologie (PS) : Cours inédit prononcé à La Sorbonne en



---

1913-1914 et restitué par Armand Cuvillier d'après des notes d' étudiants, Paris : Librairie philosophique J. Vrin, 1955. (エミール・デュルケム遺稿、アルマン・キュヴィリエ編『プラグマティズム二〇講』福鎌達夫訳、1960年。Pragmatism and sociology, Cambridge University Press, 1983.) 以下、引用にあたっては邦訳と英訳を参照しつつ、最終的には仏語原文に沿うように訳出した。

<sup>3</sup> PS, p.7-8, 邦訳 8～10 頁。

<sup>4</sup> 'Editorial introduction to the English translation', Pragmatism and sociology, xxiii.

<sup>5</sup> 山崎亮氏はデュルケムの『宗教生活の基本形態』におけるジェイムズの『宗教的経験の諸相』への言及に注目し、宗教経験をめぐる両者の見解に、一定の「類似性ないしは親近性」があった可能性を指摘している（山崎亮『デュルケム宗教学思想の研究』未来社、2001年、序章および第五章）。私が両者の関係を再考すべき必要性を知り、プラグマティズム講義への関心を抱くようになったのは、この山崎氏の指摘によってである。

<sup>6</sup> PS, p.p.28, 邦訳 2 頁。彼は 1902 年から翌年にかけて行われた道德教育に関する講義でも「わが国の国民精神」に触れ、「一般にフランス人は、意識するとしないうに関わらず、ある程度デカルト哲学の信奉者」だと述べている（『道德教育論』講談社学術文庫、409 頁）。

<sup>7</sup> 清水強志『デュルケムの認識論』、恒星社厚生閣、2007 年、153 頁。

<sup>8</sup> PS, p.53, 邦訳 67 頁。

<sup>9</sup> PS, p.11, 邦訳 1 頁。

<sup>10</sup> PS, p.6, 邦訳 25 頁、英訳 p.11.

<sup>11</sup> 英訳版プラグマティズム講義の編者ジョン・オールコックは、とりわけこの二冊を読んだことが、プラグマティズムへのデュルケムの関心を強く方向づけていると見ている。

Pragmatism and sociology, xxv.

<sup>12</sup> 野家啓一監訳『哲学と自然の鏡』産業図書、1993 年。

<sup>13</sup> PS, p.93, 邦訳 88 頁。

<sup>14</sup> そのような曖昧さが残る一因は、この講義が受講者のノートによる再構成であることの限界にある。再構成された講義の叙述を読む限り、上の論点に関してはデュルケムはプラグマティズムに賛意を示しているように見えるが、前述のパネリスト山崎氏より、それは彼の他の著作における姿勢と整合しないのではないかと、との指摘を受けた。本稿を一つの手掛かりとしつつも、さらに広く彼の著作との関係を慎重に検討したい。

<sup>15</sup> PS, p.119, 邦訳 118 頁。

<sup>16</sup> PS, p.174, 邦訳 184 頁。

<sup>17</sup> PS, p.173, 邦訳 182 頁。

---

<sup>18</sup> PS, p.197, 邦訳 211 頁。

<sup>19</sup> *ibid.*

<sup>20</sup> 『宗教生活』下巻、441 頁。

<sup>21</sup> 一度目は 1937 年の『社会的行為の構造』において、二度目は 1978 年の『行為理論と人間の条件 第三部』の「デュルケームの宗教論再訪」においてである。上記の該当箇所は Talcott Parsons, Action theory and the human condition PARTIII, 1978, p.215. 邦訳は富永健一他訳『宗教の社会学』勁草書房、85 頁。

<sup>22</sup> このようなデュルケームのプラグマティズム理解にはいくつかの誤解が含まれると私は考えるが、ここでは問題としない。

<sup>23</sup> PS, p.137, 邦訳 140 頁。

<sup>24</sup> ジェイムズの代表的著作の仏訳の刊行年は、下記のとおりである（括弧内は原書の刊行年）。多くが原書の刊行からさほど年数を隔てずに仏訳されていることがわかる。なお、デュルケームはこの講義の中で以下のすべてを引用している。

1898 『信じる意志』（1897）

1906 『宗教的経験の諸相』（1901-2）

1909 『心理学（簡略版）』（1892）

1910 『多元的宇宙』（1909）

1911 『プラグマティズム』（1907）

1913 『真理の意味』（1909）

<sup>25</sup> PS, p.170, 邦訳 178 頁。

<sup>26</sup> Émile Marie Boutroux, trans. by Archibald & Barbara Henderson, William James, Longman, Green, co., 1912.

<sup>27</sup> *ibid.*, vi.

<sup>28</sup> 山崎亮「訳者解説」『宗教生活』下巻、461 頁。1911 年 9 月のジョルジュ・タヴィ宛の書簡の一節とのこと。